
シンポジウム 1

前立腺癌；Next 10 Years ～どうなる，どうする，前立腺癌～

司 会	賀 本 敏 行 (宮 崎 大)
	井 川 掌 (久留米大)
演 者	加 藤 琢 磨 (香 川 大)
	三 浦 徳 宣 (愛 媛 大)
	小 林 泰 之 (岡 山 大)
	松 本 洋 明 (山 口 大)
	柏 木 英 志 (九 州 大)
	富 崎 一 向 (産 業 医 大)

司会のことば

このシンポジウム 1 の企画にあたっては，メインテーマである Past and Next 10 Years について様々な思いを巡らせた結果，ディベート形式により 3 つのテーマについて Next 10 Years を 3 組計 6 名の論客に議論して頂くことにしたことは学会抄録集の座長の言葉にも書かせていただきました。6 名の先生による熱いプレゼンに加え，今回は藤本会長に無茶なお願いを快く受けていただき，聴衆の先生方にも Voting で参加してもらったこともあり，開会式直後のまだ早い時間帯のセッションにもかかわらず印象に残るシンポジウムの 1 つになったのではないかと司会二人は自負しております。

さて，1 つ目は香川大学の加藤琢磨先生による画像診断究極の進化形である MRI fusion biopsy と愛媛大学の三浦徳宣先生による先進的研究の結晶である Liquid Biopsy の対決でした。おそらく数年前にこの議論をしたとしたら，今回のように現実味のある内容にはならなかったと思います。それくらい，いずれも臨床実装が進んできており，これから 10 年にさらに進歩が期待される内容でした。

2 つ目は限局癌に対する局所治療について，岡山大学

の小林泰之先生による Focal therapy と山口大学の松本洋明先生の Total therapy の対決でした。この 2 つは泌尿器医の前立腺癌局所治療のポリシーを問われる結構デリケートな課題ではないかと思います。演者のお二人も随所に考察の工夫を盛り込んだプレゼンテーションでしたが，いずれも説得力があり，これから 10 年さらに適応の住みわけが進むことが期待されました。

3 つ目は進行癌に対する全身治療について，AR 標的治療の立場で産業医大の富崎一向先生と遺伝子診断に立脚する治療の立場で九州大学の柏木英志先生の対決でした。これも泌尿器科医にとって前立腺癌のバイオロジーに対する基本姿勢を問われる少々厳しい課題でした。やはり AR 軸に立脚する AR 標的治療は根幹でありながら，時代は確実にゲノム医療に依拠しつつあります。おそらくこの先 10 年で最も進化する領域かもしれません。

総括しますと 3 つのディベートはいずれもドローで，むしろそれぞれに新たな意義を見いだすことができた素晴らしいシンポジウムだったのではないのでしょうか。これも 6 名のシンポジストの前立腺癌診療に対する深い造詣と熱い思いのおかげだと思います。司会の二人もあらためて 6 名の先生方に拍手を送ります。